

長岡京跡右京第766次
発掘調査報告

2003

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター



(1) 周溝S D16出土弥生土器



(2) 周溝S D16土器出土状況(南東から)



(3) ミニチュア土器検出状況

序 文

長岡京市には、かつて「長岡京」という都がおかれ、王城の地として栄えたのを含め、様々な時代の文化が刻まれており、今も昔も人が生活するのに適した環境にあります。

また現在では、大阪と京都の中間に位置し交通の便もいいことから人々が集まり、新たな文化が育まれています。

長岡京市では平成10年度から長岡京駅西口再開発に伴う発掘調査を継続的にこなっており、本書で報告しますのは長岡京駅前線（B-4地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査成果です。

周辺には長岡京を始め、永井氏勝龍寺城跡、神足遺跡といった重要な遺跡が重複して所在し、これまで数多くの成果が報告されております。

今回の調査でも神足遺跡などに関する新たな発見がなされており、たとえ道路の拡幅というトレンチ調査でも十分に成果を導き出せることが実証されております。

これらの調査成果を有効に活用し、さらに周辺での成果と合わせ、長岡京跡をはじめとする市街地内の遺跡の解明に努力しているところです。

最後になりましたが、調査の実施・整理にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係機関、関係者の方々に厚くお礼申し上げますとともに、今後もなお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

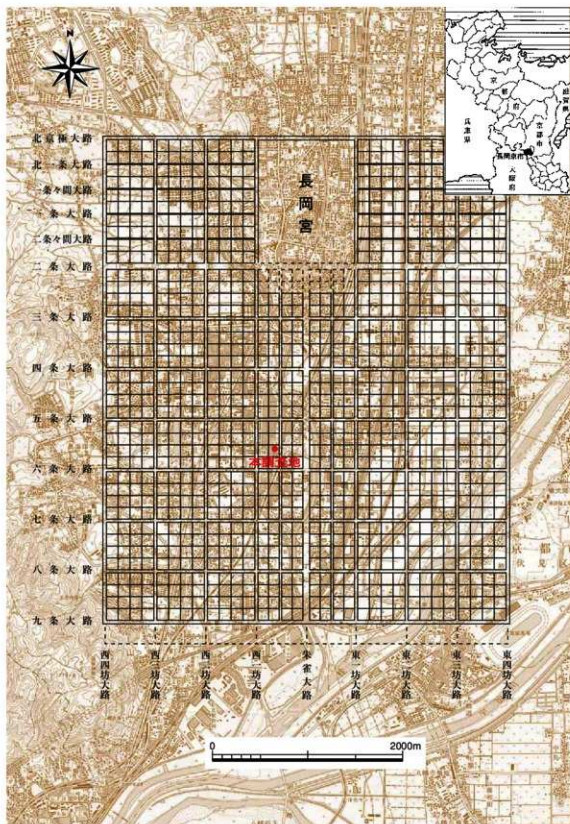
平成15年7月

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
理事長 芦田 富男

凡 例

1. 本書は、平成14年度の長岡京駅西口地区市街地再開発にともない、2003年3月4日から同年4月11日まで神足一丁目地内で実施した長岡京跡右京第766次調査の概要報告である。
2. 本調査の対象遺跡は、長岡京跡右京六条一坊十一町、神足遺跡、近世勝龍寺城跡である。
3. 調査地は、長岡京駅西口地区市街地再開発組合「全画地指摘図」記載地区名のB-4地区、長岡京の調査地区名では7ANMDB-9地区にあたる。調査は、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが長岡京駅西口地区市街地再開発組合の委託を受け、現地調査は同センター調査係主査木村泰彦が行った。
4. 長岡京跡の調査次数は、右京域と左京域に分けて調査件数を通算したものである。調査地区名は、基本的に前半は奈良国立文化財研究所による遺跡分類表示、後半は京都市教育委員会「埋蔵文化財発掘調査概報」（1977年）収録の旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。
5. 長岡京の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号の復原に従った。
6. 本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集（1985年）に従って略記した。
7. 本書挿図の土層名で（ ）を付けて示した記号は、『新版標準土色帳』（1997年版）のJIS表記法による土色である。
8. 本書で使用している国土地座標は、旧座標系第VI系である。北緯・東経もそれによっている。
9. 遺物写真の撮影は、当センター係長小田桐淳、同主査中島皆夫が行った。
10. 本書の執筆と編集は木村が行った。

*表紙 周溝S D16出土弥生土器



第1図 長岡宮と調査地の位置 (1/40000)

本文目次

序文	i
凡例	ii
1 はじめに	1
2 調査経過	2
3 検出遺構	2
(1) 江戸時代の遺構	5
(2) 長岡京期の遺構	6
(3) 弥生時代の遺構	7
(4) その他の遺構	9
4 出土遺物	9
(1) 室町時代の遺物	9
(2) 長岡京期の遺物	9
(3) 弥生時代の遺物	13
(4) 石製品・銭貨	14
5 まとめ	14

図 版 目 次

- 巻頭図版 (1) 周溝SD16出土弥生土器
(2) 周溝SD16土器出土状況(南東から)
(3) ミニチュア土器検出状況
- 図版 1 (1) 南調査区上層全景(北から)
(2) 南調査区下層全景(北から)
- 図版 2 (1) 南調査区下層完掘状況全景(南から)
(2) 周溝SD08(南東から)
- 図版 3 (1) 北調査区上層全景(南から)
(2) 北調査区上層全景(北から)
- 図版 4 (1) 北調査区下層全景(南から)
(2) 北調査区下層全景(北から)
- 図版 5 (1) 周溝SD16弥生土器出土状況(南東から)
(2) 周溝SD17・SD18(南東から)
- 図版 6 出土遺物
- 図版 7 出土遺物-土師器
- 図版 8 (1) 出土遺物-磁器、須恵器
(2) 出土遺物-弥生土器

挿 図 目 次

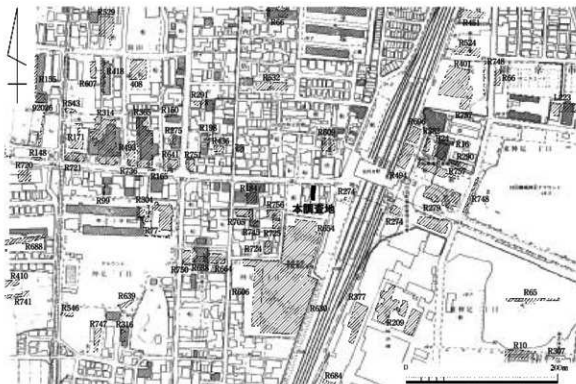
第1図	長岡京と調査地の位置 (1/40000)	iii
第2図	発掘調査地位置図 (1/5000)	1
第3図	北調査区調査風景 (南から)	2
第4図	南調査区調査風景 (北から)	2
第5図	調査区土層図 (1/100)	3
第6図	検出遺構図 (1/100)	4
第7図	横列 S A 21・S A 22実測図 (1/40)	5
第8図	土坑 S K 13・S K 14実測図、溝 S D 06・S D 10・S D 11断面図 (1/40)	6
第9図	周溝 S D 08・09・16・17断面図 (1/40)	7
第10図	周溝 S D 16弥生土器出土状況実測図 (1/20)	8
第11図	出土遺物実測図 (1/4)	10
第12図	周溝 S D 08・S D 16出土遺物実測図 (1/4)	12
第13図	石製品・銭貨実測図 (1/2)	14

付 表 目 次

付表-1	報告書抄録	16
------	-------------	----

1 はじめに

今回の調査は長岡京駅西口再開発事業に伴って実施したB-4地区に関するものである。調査地はJR長岡京駅の南西約50m、長岡京駅から西に伸びる市道長岡京駅前線の南に面した場所で、以前は民家が存在したが、その後解体・整地され、現状では駐車場となっている。大正11年測図、昭和10年修正の地図によると民家建設以前は竹藪であったことが知られる。地形分類上では低位段丘Iにあたり、現状の整地面での標高は19.0mである。調査地周辺ではこれまでも長岡京駅西口再開発事業に伴う調査が行われ、数多くの成果が得られている。特に今回の調査地の南にある工場跡地で行われた右京第606・630・654調査では、約7000mにおよぶ広い範囲から江戸時代勝龍寺城、長岡京期および弥生時代、古墳時代、鎌倉時代の神足遺跡に関する重要な発見がなされた。江戸時代では、「永井直清公御在所城州神足の園」に示されている足軽町の長大な建物・茶屋口の門・城の西側を画する南北方向の堀などが見つかった。特に門の遺構は江戸時代勝龍寺城では初めての発見であり、また地中に礎石を据える非常に特異な基礎構造を持つことも判明した。長岡京期では前後2時期の遺構群が確認された。前期の遺構では、整然と配置された30棟近くの東西棟建物群が検出され、建物の配置状況から4町域という広範囲にわたる宅地利用がなされていたことが判明した。後期では一部これらの建物を切る形で東西・南北方向の小溝群が多数検出され、同時に多量の遺物も出土している。弥生時代に関しても大規模な方形周溝墓群が検出され、神足遺跡における墓域の広がりや変遷の状況が判明するとともに、非常に珍しい猪と見られる動物の土製品が出土している。この他にも周辺地では右京第638・664・705・724・725・745・



第2図 発掘調査地位図 (1/5000)

⁽¹⁰⁾756次調査が行われており、長岡京期建物群の広がりや、弥生時代神足遺跡の居住域と墓域の変遷を示す資料などのほか各時代にわたって多くの貴重な成果が得られている。これらのことから、今回の調査地においても遺構・遺物の検出が期待されるところであった。

2 調査経過

調査地は周囲を住宅に囲まれており、土置場の確保ができないため、南北2回に分けて調査を行うこととした。2003年3月4日にまず調査地周辺に防塵用としてブルーシートの設置を行った。その後南北20m、東西は北辺で6.2m、南辺で5mの調査区を設定し、駐車場のアスファルトを除去した後、南半部の南北約10m部分（南調査区）を重機で掘削した。しかしながらアスファルト直下のバラスが非常に厚く、堅いため、重機による掘り下げは非常に難航した。さらに盛土・耕作土の除去を行ったところ、遺構面まで約2mと予想よりも深くなったため、調査地内での排土処理が不可能となり、一部を持ち出さざるを得なくなった。3月6日より上層の長岡京期の遺構精査、実測・写真撮影の後、人力により下層の弥生時代遺構面まで掘り下げを行った。その後、3月24日に一旦埋戻しを行い、3月26日から北側の残り南北10m部分（北調査区）の掘削を開始した。北調査区では弥生時代の包含層はほとんど削平されていたため、各時期の遺構はほぼ同一面で検出されている。上層の江戸時代・長岡京期、下層の弥生時代の遺構面でそれぞれ実測・写真撮影を行った後、4月10日から埋戻しを行い、4月11日に機材の撤去をもって現地での調査をすべて終了した。南北の調査区を合わせた調査面積は99m²、調査地の中心は第VI座標系におけるX=-119.756、Y=-27.158に位置する。

3 検出遺構

調査地の層序は、最上層が駐車場整備に伴うアスファルトで、その下に堅く締まったバラスがある（第1層）。このバラスは排水のために傾斜が付けられており、厚さは南東が0.7m、北西が0.3mである。その下には以前に建てられていた建物の建設時および解体時の整地土（第2層）が約0.7mあり、部分的に深く掘り込まれている。この下は建物建設以前の竹藪客土（第3層）、江



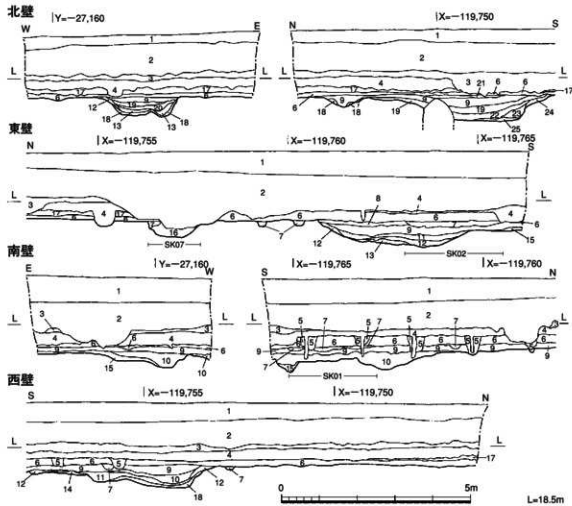
第3図 北調査区調査風景（南から）



第4図 南調査区調査風景（北から）

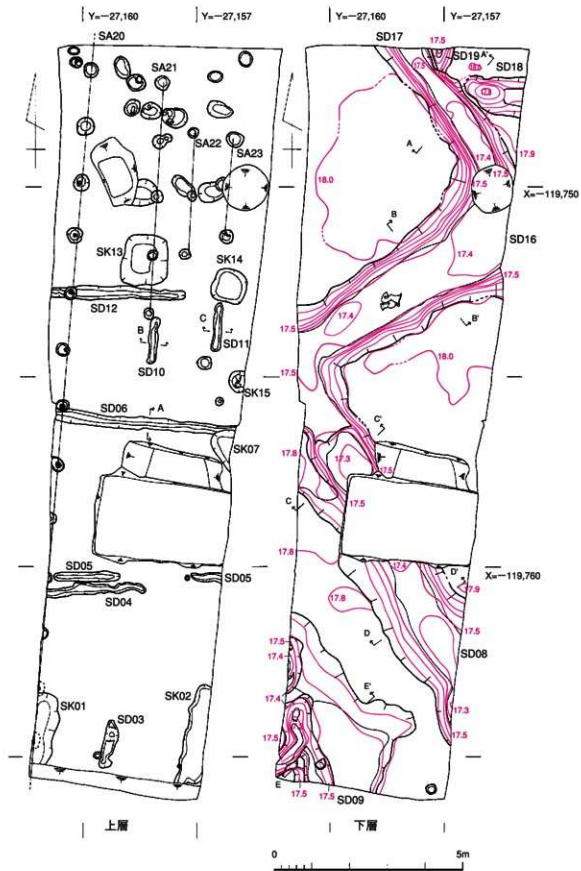
戸時代包含層（第4層）が約0.4m、さらに長岡京期の遺物を多く含んだ厚さ約0.3mの黒褐色粘質土（第6層）があり、これらを除去した段階で長岡京期の遺構面となる。この遺構面は北から南に向かって緩やかに傾斜しており、検出面の標高は北で18.0m、南で17.8mである。北半部は黄褐色の地山面が現れるが、南半部では弥生時代の包含層（第9層）が約0.1～0.2mの厚さで堆積しており、これらを除去した段階で、弥生時代の遺構面となる。掘り下げ段階における南側の標高は17.6mとなっている。

検出された遺構には、江戸時代勝龍寺城、長岡京期、弥生時代と時期不明のものがあり、ほかに以前の建物に伴うコンクリート製の防空壕と井戸がある。



- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1 駐車場整地土（アスファルト・コンクリート砕） | 13 暗赤褐色礫混り砂質土（5YR3/2） |
| 2 建物解体・整地土 | 14 褐色粘質土（7.5YR4/4） |
| 3 暗オリーブ褐色砂質土（2.5Y3/3） | 15 褐色粘土（7.5YR3/2） |
| 4 にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3） | 16 にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）（SK07埋土） |
| 5 褐色砂質土（10YR4/4） | 17 暗褐色粘質土（10YR3/3） |
| 6 黒褐色粘質土（7.5YR3/1）（長岡京期遺物を含む） | 18 暗褐色弱砂質土（7.5YR3/3） |
| 7 黒褐色粘質土（5YR2/1）（長岡京期遺構面含む） | 19 黒褐色粘質土（7.5YR3/2） |
| 8 黒色粘質土砂混り（10YR） | 20 黒褐色礫混り粘質土（7.5YR2/2） |
| 9 黒色弱粘質土（10YR2/1）拳大礫混り | 21 赤黒色礫混り粘質土（10R2/1） |
| 10 黒色粘質土（2.5Y2/1） | 22 暗赤褐色小礫混り粘質土（5YR3/2） |
| 11 黒褐色弱粘質土（7.5YR3/1） | 23 褐色粘質土（7.5YR4/4） |
| 12 黒褐色弱砂質土（10YR3/1） | 24 暗褐色小礫混り砂質土（7.5YR3/4） |
| | 25 褐色シルト礫混り（10YR4/4） |

第5図 調査区土層図（1/100）



第6図 検出遺構図 (1/100)

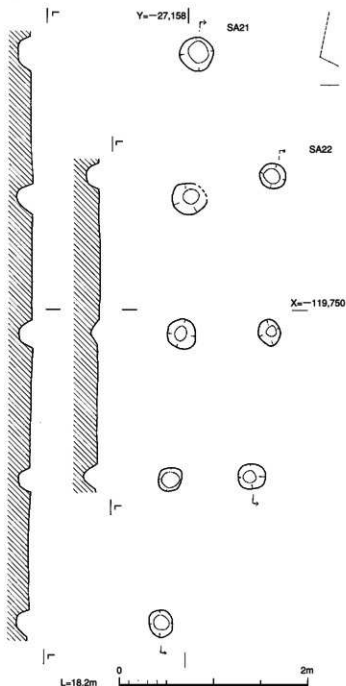
(1) 江戸時代の遺構

江戸時代の遺構群は、すべて勝龍寺城に関連するもので、褐色砂質土（第5層）の埋土であることから容易に識別ができる。これは周辺での調査状況と共通する特徴である。

欄 S A20 調査地の西辺で検出された南北方向の欄列で、方位は北で5.5度東に傾いている。13基分のピットが確認されたが、南部の5基はトレンチ西壁にかかっており全容は不明である。掘形は直径0.3~0.4m、深さは0.2~0.5mとピットによりややばらつきがある。内部には直径約0.1mの非常に細い柱痕が見られるが、興味深いことにほとんどのものが掘形底部より深くなっている（第5図）。したがって柱と言うよりも杭に近い状況であるが、平面・断面ともに柱から杭に作り替えられた様な痕跡は認められなかった。したがって当初からこのような構造を持っていた可能性が高いとみられるが、もともと杭列であれば掘形は不必要であり疑問が残るところである。柱間はそれぞれ1.4~1.5mである。この欄列は当調査地の南で行われた右京第654次調査で確認されている欄 S A35の延長部分にあたるもので、「永井直清公御在所城州神足之園」に示されている足軽町と武家屋敷を画する施設と考えられる。ただし欄 S A35では当調査地の様な構造は確認されていない。

欄 S A21 調査地北半部で検出された南北方向の欄列で、欄 S A20の東2mに位置している。ピット5基分が確認されたが、さらに北側に伸びる可能性がある。各ピットの直径は0.25~0.35m、深さは0.1~0.15mで、欄 S A20よりも小規模である。柱痕は確認できなかったが、柱間は同じく約1.5mである。

欄 S A22 欄 S A21の東0.8mで検出された南北方向に並ぶ3基のピットである。ピットの直径は0.25~0.3m、深さは0.1~0.15m、欄 S A21



第7図 欄列 S A21・S A22実測図 (1/40)

と同じく柱痕は確認できなかったが柱間はやや広く約1.6mである。

橋S A23 橋S A22の東約1mで検出された同じく南北方向に並ぶ3基のピットで、中央のものは現代の井戸によって切られている。直径0.35~0.45m、深さ0.1~0.2m、柱間は約1.3m前後と狭くなっている。橋S A21~23は非常に近い距離にあることから、建て替えの可能性も考えられる。また橋S A22・23は柱間2間分であることから見て小規模な建物の一部の可能性もあろうが、狭い調査地では断定するには至らなかった。

土坑S K15 調査地中央東辺で検出された平面円形の土坑。直径約0.6m、深さ0.4mで、内部には2個の自然石が埋置されていた。柱痕はなく、欄列や建物としての広がりも確認されていないため、土坑と判断したものである。

(2) 長岡京期の遺構

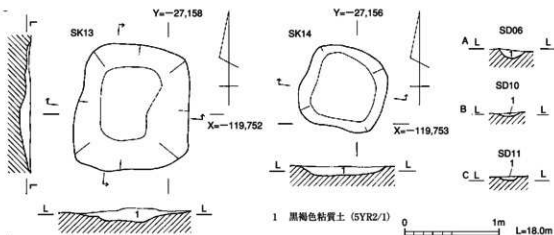
長岡京期の遺構には小溝と土坑があり、掘立柱建物の掘形などは確認されていない。このうち小溝は、右京第630・654次調査の成果から、長岡京後期の遺構群に含まれるものと考えられる。埋土はいずれも黒褐色粘質土（第7層）である。

土坑S K01 調査地の南西隅で検出された浅い落ち込みで、平面形は不明であるが、方形ないし長方形を呈するとみられる。南北約2m、東西0.6m以上、深さ約0.1mである。

土坑S K02 調査地南東隅で検出された土坑S K01と同様の在り方を示すものである。西辺はほぼS K01の東辺と平行しており、約3.3mの間隔がある。南北約3m、東西0.7m以上、深さ約0.1mで底部はほぼ平坦である。内部からは小片がほとんどであるが長岡京期の遺物が比較的多く出土している。

土坑S K13 調査地北半部中央付近で検出された平面方形を呈する土坑である。南北1.3m、東西1.2m、底部は掘鉢状に深くなり中央部で深さ0.15mである。やはり小片ではあるが長岡京期の遺物を多く含んでいる。また炭の混入が認められる。

土坑S K14 調査地北半部東寄りにある同じく平面方形の土坑。遺物がまったく出土しておらず、明確な時期は不明であるが、埋土が黒褐色粘質土であり、平面方形を呈することから長岡京期に含めた。南北0.85m、東西0.8m、深さ0.1mで、底部は平坦である。



第8図 土坑S K13・S K14実測図、溝SD06・SD10・SD11断面図 (1/40)

溝SD03 調査地の南辺、SK01とSK02のほぼ中間付近で検出された、南北方向の溝状落ち込みである。溝の方向はSK01とSK02の各辺と同様で北で東に約10度傾く。長さ1.3m、幅0.3mで、北側は一段深く0.2m、南は0.1mである。

溝SD10・11 調査地北半部で平行して検出された南北方向の短い溝である。幅0.2m、深さは0.05m、長さはSD10が1.25m、SD11が1.3mで、両者の間隔は溝の中心で約1.7mである。遺物は出土していない。

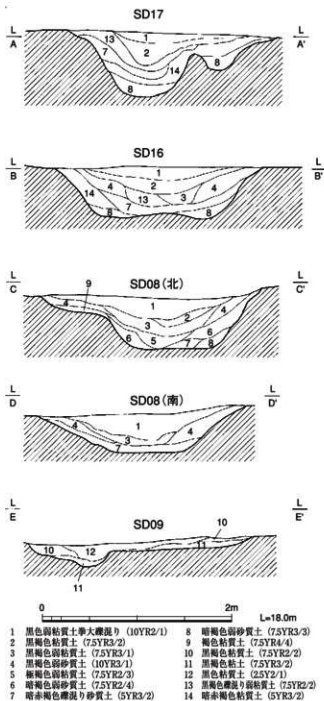
溝SD04・05 調査地南半部で隣接して検出された東西方向の溝である。SD05はほぼ正方形で、中央で途切れており、幅0.2m前後、深さ0.1mである。SD04は長さ2.7m、幅0.15～0.25m、深さ0.1mで、東側で浅くなって終わる。東で北に約3度傾く。両者に切り合いは確認できないが、非常に接近していること、若干方向が異なることから、作り替えの可能性も考えられる。

溝SD06 調査地中央で検出された東西方向の溝で、東で南に約5度の傾きを持つ。幅0.25～0.35m、深さ0.1mで、小規模な溝であるが内部に遺物が多く含まれていた。南の溝SD04・05との距離は約4～4.5m、北の溝SD12との距離は3.2～3.5mである。

溝SD12 調査地北半部で土坑SK13の南辺に接する形で検出された溝で、SD05と同じくほぼ正方位を向くものである。長さ3.5m、幅0.25～0.35m、深さ0.1mで、SD05との溝中心での距離は7.5mである。

(3) 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構はすべて方形周溝墓の周溝と見られるものである。調査地が狭いため、広がりや明確ではなく、規模・全形の判明するものはない。おそらく周溝を共有するものが2基(SD08・16・17)と方向が異なるもの1



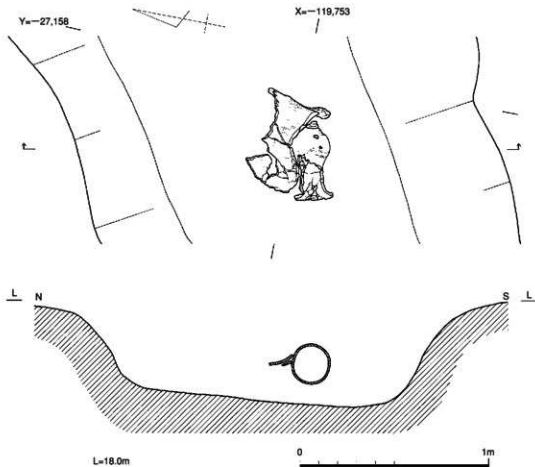
第9図 周溝SD08・09・16・17断面図 (1/40)

基（SD18・19）と見られる。

周溝SD08 調査地南半分で検出された北西から南東方向の周溝である。中央付近を防空壕によって切られているため不明な部分もあるが、幅は2.1~2.4m、深さは0.4~0.5mで、北半部付近に方形に一段深くなる箇所があり、おそらく溝内埋葬施設と考えられる。幅は約1.4m、深さは0.2mで、長さに関しては南側を先の防空壕に切られているため不明であるが、現状で約1.5mである。内部には棺などの痕跡はなく、副葬品なども見られなかった。また全体に遺物は少なく、かつ小片が多い。

周溝SD09 調査地南西部で検出された溝状の落ち込みである。弥生時代の包含層を掘り下げた段階で土色の変化が見られたため方形周溝墓の一部と判断し掘り下げたが、遺物がまったく出土しておらず、また形状も不整形であるため、周溝の可能性は低いとみられる。

周溝SD16 調査地北半部、周溝SD08の北に接続する北東から南西方向の周溝である。幅は南西部が1.8m、北東部は広くなり2.6mである。深さは0.5~0.6mで北東部がやや深くなっている。埋土は大きく上層（第1・2層）、中層（第3・4・13層）、下層（7・8・14層）に大別されるが、このうち中層を中心として多くの遺物が出土している。大半のものは破片であるが、中央部からはほぼ完形の広口壺（第12図50）が1点横倒しの状態で検出され、さらにそれに接して大形の広口壺（第12図48）の口縁部が出土した（第10図）。大形の壺は上半部の破片が主に中央部周



第10図 周溝SD16弥生土器出土状況実測図 (1/20)

辺に、底部から下半部の破片が北東部に集中しており、供献されたものが周溝内に転落したものと見られる。また後の土器洗浄の段階で、横倒しで検出された中型の広口壺内部からミニチュアの壺（第12図51）が検出された。これは最初から納められていたものか、あるいは転落時に偶然入り込んだものか判断は困難であるが、前者の可能性が高いと思われる。

周溝 S D 17 調査地北辺で検出された北西から南東方向の周溝で、S D 16と接続するものである。幅は S D 08・16よりも狭く1.1～1.4m、深さは南東部で0.7m、北西部で0.5mである。遺物は非常に少なく、かつ小片ばかりであった。

周溝 S D 18・S D 19 調査地北東隅で検出された東西方向と南北方向の周溝である。部分的な検出のため明確ではないが、北東に広がる方形周溝墓と見られ、コーナー部を掘り残して陸橋部を作るものであろう。方向は周溝 S D 08・16・17とは異なりほぼ正方位を向く。S D 18は幅1m、深さ0.25m、西側は一段深くなり0.4m、S D 19は幅0.6m、深さ0.5mで、S D 17の北東辺に接しているが、断面では明確な切り合いは確認できなかった。また検出範囲内では遺物の出土は認められなかった。

(4) その他の遺構

土坑 S K 07 調査地中央東辺で検出された平面楕円形を呈するとみられるもの。全形は不明であるが、幅約0.8m、深さは0.4mである。埋土にはぶい黄褐色粘質土（第16層）で、他の時期の遺構とは異なっている。長岡京期の溝 S D 06に切られていることからそれ以前のものであるが、遺物がまったく出土しておらず明確な時期や性格は不明である。

4 出土遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナにして5箱で、最も多いものが周溝内から出土した弥生時代の遺物で約3箱。次いで包含層出土のものを含めた長岡京期の遺物が約2箱で、他に少量ではあるが室町時代・江戸時代の遺物がある。

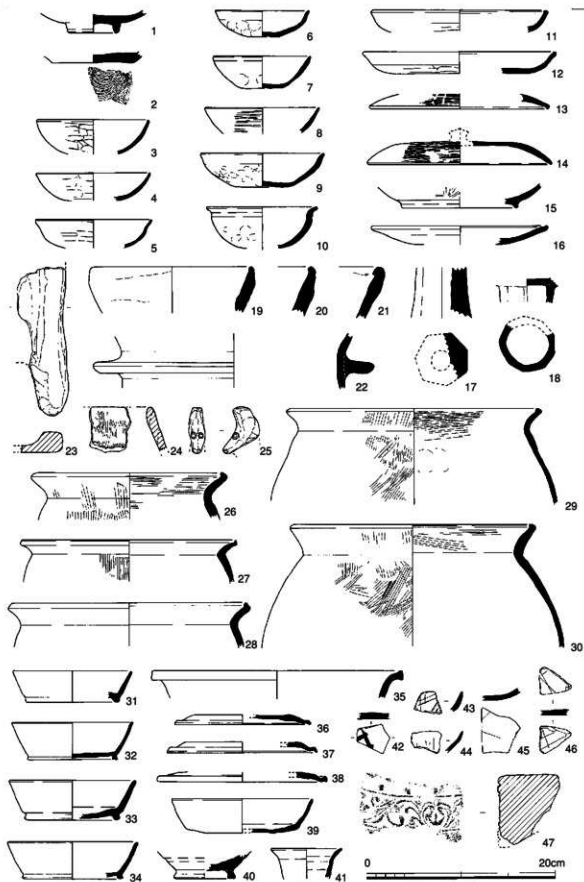
(1) 室町時代の遺物

江戸時代勝龍寺城の遺構群はこれまでの調査結果からも遺物は極めて少量しかなく、柱掘りからの出土は稀である。今回の調査でも大半のピットには遺物が含まれておらず、横列 S A 21と横 S A 22から数点の小片が確認されたのみである。出土した土師器は非常に小片で図示することはできない。図示できたものはいずれも混入と見られる15世紀後半頃のものである。1は S A 22出土の青磁碗の底部片、2は S A 21出土の瀬戸の底部糸切りによる筒形容器と見られる底部片である。これらは時期的に細川氏勝龍寺城に関連する遺物と考えられる。

(2) 長岡京期の遺物

長岡京期の遺物は全体に出土量は多いが小片が多く、図化に際しては口径の復原などにやや難がある。また遺構出土のものは良好なものは少なく、包含層出土のものが大半を占めている。

土師器 椀Aのうち3～5は外面全体をヘラケズリするc手法のものである。口径12cm前後に復元される。このうち5は非常に器壁が薄く、口縁部のヨコナデが強く外反する口縁部を持つ。



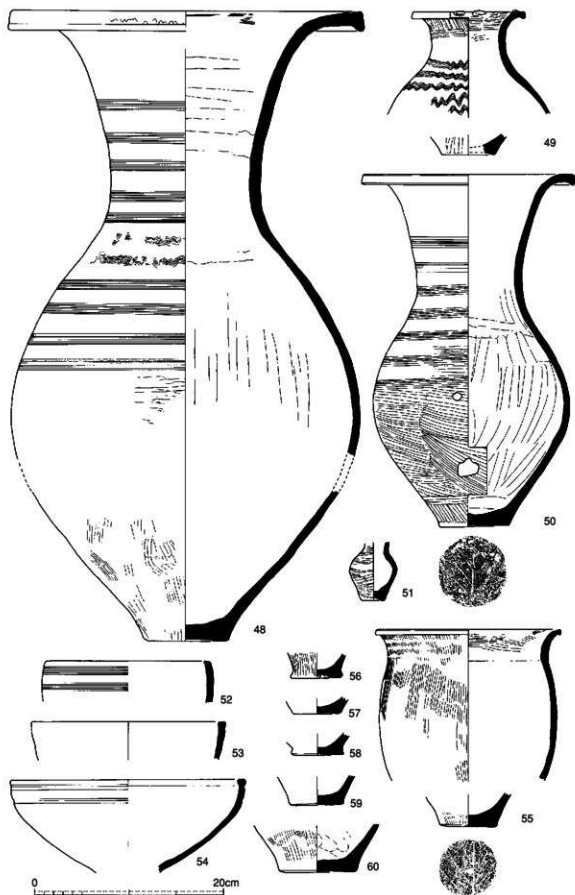
1-SA22, 2-SA21, 21-SK01, 4-5-6-8-19-20-31-32-SK02, 11-13-23-35-40-SD06, 28-SD12, 26-36-37-39-SK13, 他-包含層

第11圖 出土遺物実測圖 (1/4)

そのためヘラケズリは端部まで施されるが、口縁部外面はケズリ残されている。6・7・9は内面および口縁部をヨコナデし他は不調整のもの。8は外面に粗い横方向のヘラミガキを施す。10は土師器の壺C。口径11.5cmで内面と口縁部をヨコナデし他は不調整である。外面に墨書などは確認できなかった。皿(11・12)は口径20cm前後に復元されるもの。ともにc手法であるが、外面のヘラケズリが口縁端部までおよんでいない。杯B蓋(13・14)はいずれもつまみを欠いている。天井部に細いヘラミガキを密に施している。直径19cm前後に復元される。盤(15)は高台付近の破片で、貼り付けによる高台径は12.4cmである。外面には縦方向のハケメ状の痕跡がわずかに認められる。16は高杯の杯部片である。口径18.6cmの小形品で、外面はヘラケズリの後粗いヘラミガキを施す。高杯の脚部には、心棒に粘土を巻き付けるもの(17)と、粘土紐を巻き上げて作るもの(18)がある。いずれも破片であるが、ケズリにより17は7~8面、18は10~11面に作る。19~21は製塩土器である。破片数が多いが図示可能なものはこの3点のみであった。いずれも口縁部が内湾気味に大きく開くもので、端部が丸く終わるもの(19)と内側に折り曲げるもの(20・21)がある。羽釜(22)は口縁端部を欠くが鈔の径が約30cmに復元されるもの。磨滅が著しく調整は不明であるが、角閃石を含む茶褐色の特徴的な胎土を持つ生駒西麓産のものである。23・24は同じく生駒西麓産の移動式カマドの破片である。23は焚口およびその下の脚部で、粘土帯貼り付けにより補強を行っている。これも剝離のため調整は不明である。24は上部の開口部片で、内面と端部をヘラケズリし、外面には縦方向のハケメが残る。また内面には煤が付着している。土馬(25)は頭部のみ破片で他に図示できないが脚部片がある。粘土板を折り曲げて頭部を挟み込んだ三日月形の頭部を作り、竹管の刺突で目を表現する。甕(26~30)は、頭部が鋭く屈曲する長胴のタイプのもの(27)と、球形の胴部を持ついわゆる都城形のもの(26・28~30)がある。調整が残るものはいずれも外面縦方向のハケ、口縁部内面が横方向のハケである。口径は20cm前後(26・27)、約25cm(28)、27cm前後(29・30)のものがある。

須恵器 全体に出土量は少なく、図化できるものはさらに限られる。杯B(31~34)はいずれも口径13cm前後のもので、器高は31が3.3cmと低く、他は約4cmである。また33は全体に器壁が厚く高台の貼り付け位置がやや内側寄りである。杯蓋はいずれも小片で、天井部が平坦なものがある。つまみの残るものはない。直径15cm前後のもの(36・37)と約18cmのもの(38)がある。杯Aは図示できたものは1点だけ(39)である。直線的に開く口縁部とやや丸味を帯びた底部からなり、口径14.8cm、器高3.6cm、灰白色を呈し非常に軟質である。40は壺Lの底部片で、高台径は6.5cmである。内面にはロクロ水挽き跡が残るが、底部はヘラ切りである。41は壺Gの口縁部片である。内外面暗灰色、胎土は赤褐色を呈し、薄く硬質に焼き上がる。口径約7.5cmに復元される。35は甕の口縁部片である。口径は小片のため復元が難しいが約26cmである。端部を拡張させて平坦面を作るもので、内外面に淡緑色の自然釉がかかっている。

墨書・線刻土器 42は杯又は皿の底部外面に「井」?と書かれたもの。記号あるいは文字のどちらとも判断がつかぬ。墨書土器はこれ1点のみである。線刻土器には土師器と須恵器がある。43は小片のため全体は不明であるが、碗A口縁部内面に2本の平行線を組み合わせた線刻を



第12図 周溝 S D08・S D16出土遺物実測図 (1/4)

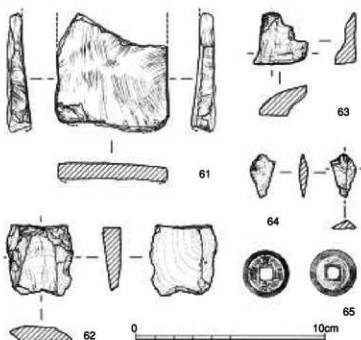
施すもの。44は碗Cの口縁部内面に縦方向に平行する密な線刻を入れるもので、破片では4本確認できる。45は碗A底部外面に「×」状の線刻を施したものである。46は灰白色を呈する軟質の須恵器杯ないし皿の底部片で、内外面に細い線刻を入れている。このような軟質の須恵器を用いた線刻土器は、当調査地の南で行われた右京第630・654次調査でも数点確認されている。

軒平瓦 47は遺構に伴わないが、軒平瓦の中心飾りの付近の破片である。文様の特徴から改刻された後の平城宮6732Zb型式と見られる。凹面の一部に布目が残されている。

(3) 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は大半が周溝SD16から出土している。本来の供献箇所から転落したものと見られほとんどが破片であるが、検出遺構でも述べた如く一部完形に近い状態のものもある。全体に表面の磨減が著しく、調整を看取できる資料は限られる。図示できたのは周溝SD08出土のものが1点(52)で、他はすべて周溝SD16出土のものである。

48は大形の広口壺で、口縁部は拡張させて外傾する面を作り出す。この面には波状文を施すが、非常に弱いためわずかに痕跡が残るのみである。頸部には5条、胴部上半には4条の櫛描直線文を巡らせ、その間は2条の波状文が施される。内面は胴部が縦方向、頸部から口縁部が横方向のナデ調整、口縁部はヨコハケを施す。外面は胴部中央に横方向、下半に縦方向のヘラミガキが確認される。口径37.0cm、復元される器高は約67cmである。50は48と並ぶように出土した広口壺で、同様に端部を拡張させているが無文である。胴部より上に7条の櫛描直線文を施す。上半部は磨減のため調整が不明瞭であるが、外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。胴部には最大径付近と底部付近の2箇所縦方向に穿孔がなされている。底部には木の葉圧痕が残る。口径22.8cm、器高37.5cmである。51は土器洗浄時に50の広口壺内部から見つかった手捏ねのミニチュア壺である。口縁部を欠失しているが、広口壺を表現したものと思われる。外面はヘラミガキの後手持ちにより横方向に3条の櫛描直線文を入れている。底径2.6cm、現存高6.3cmである。これらの3点の壺は相似形を呈し、周溝SD16の中央付近で集中して見つかっており、セットとして供献されていたものと見られる。49は小形の広口壺で口径14cm、上半部に5条の櫛描波状文が確認できる。口縁の内外面にはハケメが残り、口縁部内面には瘤状突起が2箇所残っている。底部は接合しないが、胎土・色調から同一個体と判断したものである。外面に縦方向のヘラミガキが施されている。52は周溝SD08出土で唯一図化できた直口壺の口縁部と見られる破片。やや内湾し、端部は平坦面をなす。外面に2条の櫛描直線文が残る。口径17.4cmに復元される。53も同じく直口壺の口縁部であるが、外面は施文されない。口径20.6cmである。54は口径約25cmに復元される高杯あるいは台付鉢である。非常に磨減が著しく調整などは看取できないが、口縁部外面に2条の凹線が確認できる。甕は図化できたのは55のみであった。胴部の最大径は中央部付近にあるもので、口縁部は緩やかに外湾し、端部は平坦面を作る。口径19.6cm。外面は縦方向のハケメ、内面は磨減が著しく口縁部のヨコハケが確認できる。底部は下半部の破片がないため接合しないが胎土・色調などから同一個体と判断したもので、外面に木の葉圧痕が残されている。56～60は底部片である。



第13図 石製品・銭貨実測図 (1/2)

江戸時代包含層の上面から出土した。

(4) 石製品・銭貨

61は長岡京期の溝S D06から出土した粘板岩製の砥石である。幅約6cmで、3面を使用しているが、剝離のため残る1面の使用状況および厚さは不明である。周溝S D16からはチャート製の剝片が出土している(63)。灰色～黄茶色を呈するもので、縄文時代の所産の可能性がある。このほかにサヌカイト製の剝片が弥生時代の包含層(63)および江戸時代のビット(64)から出土している。65の寛永通宝は

5 まとめ

今回の調査ではほぼ当初の予想通り、江戸時代勝龍寺城の櫓列、長岡京期の溝・土坑、弥生時代の方形周溝墓などが検出された。

江戸時代の櫓列は検出遺構でも述べた如く、右京第630・654次調査で検出された櫓S A35の延長部分にあたるもので、「永井直清公御在所城州神足之図」に示されている足軽町と武家屋敷を画する施設と考えられる。今回確認された杭のような状態を示す柱跡に関しては、これまで行われた勝龍寺城関連の遺構では確認されておらず、当調査地周辺のみにおける特殊な状況なのかあるいは他の個所においても行われていたものか、現在の段階では不明である。ベースとなる地質の違い、上部構造物の反映など様々な要因が考えられようが、これに関しては当調査地のみで検討できる問題ではないため類例の増加を待ちたい。

長岡京期の遺構に関しては、小溝群と小土坑のみで、建物などの遺構は確認されなかった。溝群に関しては南側の右京630・654次調査で確認された、建物群の後に作られた後期の遺構群と同様の性格を有するものであろう。前期遺構である建物群の広がりに関しては、狭い調査地のためその有無について断言はできない。ただ炭を含んだ土坑の存在は前期建物群の周辺で検出されているものと類似した存在方と言え、周辺に存在が推定される。遺物に関しては、良好な資料が少ないが比較的多くの出土量が認められる。調査地内の破片数データによると、調査地全体における土師器と須恵器の比率は土師器1300(83%)、須恵器268(17%)となり、これを遺構種類別に見ると溝群では土師器253(86%)、須恵器41(14%)、土坑群では土師器221(80%)、須恵器56(20%)、その他包含層では土師器826(83%)、須恵器171(17%)となり、ほぼ8割が土師器、

2割が須恵器となっている。黒色土器は全体で7点しかない。この状況は南側の右京630・654次調査でのデータとほぼ一致している。さらに今回の調査地でも右京630・654次調査と同様に多くの製塩土器の出土が見られた。土師器・須恵器に対しての製塩土器の破片数は調査地全体で482(23%)、溝群では75(20%)、土坑群で98(26%)、包含層で309(24%)となり、約2割が製塩土器で占められており、これも一致した状況である。これは当地周辺に広がる特殊な大規模建物群の性格を反映したものと見られるが、その意味するところは明確ではない。大量の塩の消費が大人数の居住の証、あるいは近接する西市への供給といった可能性もある。最近古墳時代の集落から出土する大量の製塩土器に関して、馬の飼育との関係を指摘する見解が示された。当地の遺構の性格を解明する上で、使役馬、牛などの関連を含めて検討すべき内容といえよう。

弥生時代の方形周溝墓群は、当調査地に広がることがあらためて確認できた。狭い調査地のため明確ではないが、溝を共有する2～3基の方形周溝墓と見られる。周溝がほぼ正方位を示すものと斜め方向に振れるものの2種類が確認されており、おそらく造営時期の差を表すものと見られる。今回の調査で確認された遺物は一部凹線文を含むものの、第Ⅲ様式段階と位置づけられるが、全容が不明であるためどの周溝墓に伴うものか現状では断定は困難である。右京第630・654次調査の結果からは、凹線文出現段階から弥生時代の神足遺跡の墓域が拡大し、それに伴い方形周溝墓の方位は振れを持つものから正方位に近いものへと変化する様子が指摘されており、今回の調査結果もそれらの状況を反映したものと考えられる。また広口壺の内部から検出されたミニチュア土器は、偶然入り込んだ可能性は否定できないものの、状況的には当初から内部に納められていたと見られる。本来の位置を保ったものではなく、また今のところ神足遺跡でこのような例がないため推定の域を出ないが、供献状況を示す珍しい例だといえよう。

- 注1) 岩崎 誠「長岡京跡右京606次・神足遺跡発掘調査報告」[長岡京市報告書]第14集 1999年
 2) 岩崎 誠・木村泰彦「右京630次調査略報」[長岡京市センター年報]平成10年度 2000年
 3) 岩崎 誠・木村泰彦「右京654次調査略報」[長岡京市センター年報]平成11年度 2001年
 岩崎 誠・木村泰彦「長岡京市センター報告書」第26集 2002年
 4) 中島皆夫・小畑佳子「右京638次・神足遺跡発掘調査報告」[長岡京市センター報告書]第15集 1999年
 5) 原 秀樹「右京664次・神足遺跡発掘調査報告」[長岡京市センター報告書]第18集 2000年
 6) 岩崎 誠「右京705次調査概要」[長岡京市センター報告書]第25集 2002年
 7) 木村泰彦「右京724次調査概要」[長岡京市センター報告書]第25集 2002年
 8) 中島皆夫「右京725次調査概要」[長岡京市センター報告書]第25集 2002年
 9) 岩崎 誠「右京745次調査概要」[長岡京市センター報告書]第29集 2003年
 10) 岩崎 誠「右京756次調査概要」[長岡京市センター報告書]第29集 2003年
 11) 小池 寛「古墳時代中期における製塩土器研究の現状と課題」[京都府埋蔵文化財情報]第86号 2002年

付表-1 報告書抄録

ふりがな	ながおきょうあとうきょうだい766じはくつちようさほうこく
書名	長岡京跡右京第766次発掘調査報告
副書名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第33集
編著者名	木村 泰彦
編集機関	財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10-1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡(右京第766次)	長岡京市神足 二丁目地内		107	37° 04' 44"	136° 18' 19"	20030304 5 20030411	99㎡	長岡京駅前 再開発事業
神足遺跡		26209	83					
近世勝龍寺城跡			84-2					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡(右京第766次)	都城跡	長岡京期	土坑、溝	須恵器、土師器	製塩土器が多く出土
神足遺跡	集落跡	弥生時代	方形周溝墓	弥生土器	壺内にミニチュア土器
近世勝龍寺城跡	城館跡	江戸時代	欄列、土坑	土師器、陶磁器	

圖 版



(1) 南調査区上層全景 (北から)



(2) 南調査区下層全景 (北から)

長岡京跡右京第766次調査

図版
二



(1) 南調査区下層完掘状況全景 (南から)



(2) 周溝SD08 (南東から)



(1) 北調査区上層全景 (南から)



(2) 北調査区上層全景 (北から)

長岡京跡右京第766次調査

図版四



(1) 北調査区下層全景 (南から)



(2) 北調査区下層全景 (北から)



(1) 周溝S D16弥生土器出土状況(南東から)



(2) 周溝S D17・S D18(南東から)

長岡京跡右京第766次調査

図版六



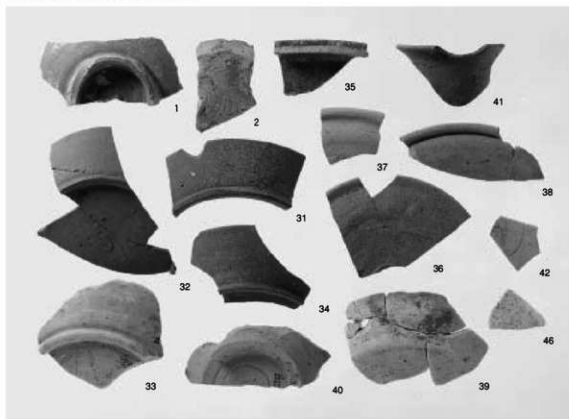
出土遺物



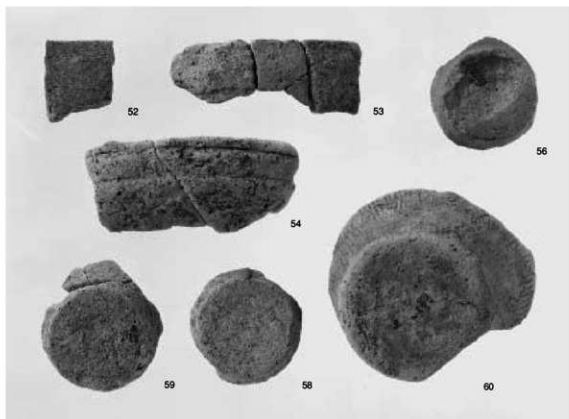
出土遺物-土師器

長岡京跡右京第766次調査

図版八



(1) 出土遺物—磁器、須恵器



(2) 出土遺物—弥生土器